

【ATC フィロソフィ②】

こんにちは、アークテックコム株式会社で、技術書類の作成と翻訳を行っています豊原 信です。

Tel : 050-6864-6201

Fax : 050-6864-6202

E-mail :

m.toyohara@arcteccom.jp

本質と胆識

今月は弊社のフィロソフィー（考え方）と、応援メッセージについてお話します。

弊社のフィロソフィー（考え方）の続きです。

物事の本質を究める

私たちはひとつのことを究めることによって初めて真理や物事の本質を体得することができると言われています。究めるということはひとつのことに精魂込めて打ち込み、その核心となる何かを掴み感動することです。この感動が潜在意識に浸透します。よって、ひとつのことを究めた体験は、他のあらゆることに通じます。

一見どんなにつまらないと思うようなことであっても、与えられた仕事を天職と思い、それに全身全霊を傾けることです。それに打ち込んで努力を続ければ、必ず真理が見えてきます。

いったん物事の真理がわかるようになると何に対しても、またどのような境遇に置かれようと、自分の力を自由自在に発揮できるようになるのです。

まずは本質を掴むようにしましょう。そこにある原理を知り原理原則に従って精進することで真理に近付けます。

先の「完璧主義を貫く」と「真面目に一生懸命仕事に打ち込む」と「地道な努力を積み重ねる」ことを四六時中やっていれば、物事の本質を感動と共に究められるようになるのです。

完全主義を貫き、仕事に打ち込みながら、3年が経ち、5年が経ち、そして10年が経っていく。そうするうちにだんだん物事の本質が究められるようになっていきます。これは、禅宗のお坊さんが座禅を組むだけではなく、自分たちで炊事をし、掃除をし、風呂を沸かし、また農作業をして自分たちの食べるものを作っています。そこでは、

あらゆる仕事に座禅と同じく修行とされているのです。

つまり、「ひとつの仕事に打ち込むこと」が修行であるわけです。例えば食物を作るという場合、雑念妄念を払拭してただ作ることに一生懸命になる。食物を作る本質を感動と共に掴み、そのことが、やがて悟りへの道を開いていくのです。年がら年中朝から晩までだるまさんみたいに座禅を組んでいれば悟りが開けるというものではありません。

「一芸に秀でる」という言葉があります。「大工の仕事を究める」ということは、ただ単に鉋をかけてすばらしい建物を造れるようになるということではなく、自らの人間性をもすばらしいものにつくり上げることに通じるのです。つまり、一芸に秀でた人、物事の本質を感動と一緒に究めた人は、万般あらゆるものに通じるようになるのです。

不変の人格は仕事に打ち込む中でつくられる

物事の本質を究めた人は、漂う風格もどこか違っています。高度な教育を学校で受けていなくても、素晴らしい人格をつくり上げています。

しかし、注意しなければならないのは、人格とは固定的でまったく変化しないものではなく、「変化する」ということです。例えば、真面目で立派な人格者だと思っていたのに、リーダーになって周りからちやほやされるうちにだんだん傲慢になり、ついには人柄がまったく変わってしまうのです。

ですから、今あるのは過去の努力の結果で、将来は今後の努力にかかっています。謙虚にひたむきに仕事に打ち込むことで、更に人格を作り続けられます。

また、あの中村天風のように若い頃は極道者で周囲の人を泣かせたけれども、晩年になって目が覚めて、素晴らしい人格者になったという例もあります。このように、人格は普通変化します。環境によって、また状況によって変わってしまうのです。

では、変化しない人格というものをつくることはできるのか。例として、内村鑑三が『代表的日本人』という著書で取り上げた二宮尊徳です。

二宮尊徳は日本の江戸時代の農民で、寺子屋で若干の勉強を

したかもしれませんが「学問を修めた」と呼べるほどのものではなく、朝は朝星、夜は夕星をいただくまで、鋤一丁鋤一丁を担ぎ、田畑に出て農作業にいそしみ、それだけで、貧しかった農村を豊かな村に変えるという偉業を成し遂げました。

この尊徳の素晴らしい業績を伝え聞いた日本各地の殿様が、貧しく疲弊した村の再建のために彼を招くようになります。尊徳もそのような要請を受け入れて、寒村を次から次へと豊かな富める村へと変えていきました。

そのうわさはやがて江戸幕府にも伝わり、殿中に尊徳を招くまでになります。そのときの様子を、内村鑑三は次のように表現しています。

「生まれも育ちも貧しく、教養も何もない一介の農民である尊徳が、侍と同じように袴を着けて城に上がり、当時の武将たちに伍して話をする。その立ち居振る舞いといい、話の内容といい、すべてが素晴らしいものであった」

つまり、人格とは仕事に打ち込むことによって身につけていくもの、仕事を自分のものにして学問にまで高めることで、哲学も身に付き人格も一緒に高まっていくのです。

物事に打ち込んで、打ち込ん

で人格をつくり上げたような人を、すべての組織のリーダーに選ぶべきです。そうすれば、集団を不幸に陥らせることはないはずです。

※2025 年 08 月号に続きます。

応援メッセージです。

知識から胆識に

一生懸命に勉強をして得た知識を使えるようにする方法を考えてみました。

実は知識と言うのは、実践では直ぐには使い物にならないのを知っていますか。その証として、知識として習得したものを他人に語ってみると中々うまく語れない。中々理解してくれない。分かってくれないのです。

その理由は、知識に傾注しているだけで、自分の魂（真我）に採り込んでいないからです。簡潔明瞭に説明が出来ないのです。

このような状態で実践にて使用しようとする、しっちゃんめっちゃかになり混乱するだけです。

ではどうするか、その知識の意義を一字一句の意味まで解きほぐし、自分の目的を達成する為の手段としてシミュレーショ

ンします。そうすることで知識に現実味が付加されます。このレベルの知識を他人に説明して、良く理解してくれるかチェックします。これを何回か繰り返すことで知識が実は見識になり信念に成って来ます。

この見識を使って実践です。処が更に厳しい仕打ちが待っています。決して実践は理論通りには進まない。原因を追究して対策を行います。これも何度も繰り返して、やっと出来るようになります。品質も安定して来ます。この状態を見識が胆識に成ったと言います。胆識になって初めて使えるのです。

本当に知識を育てるのには手間暇が掛かります。これが文化や文明の素になるのでしょうね。

豊原 信